

PRO MIXING 45 FOR VIP

■ごあいさつ

例年にない暑く長い夏も過ぎて、大変すごしやすい季節となってまいりました。VIP会員の皆様には、充実した日々を、お越しの事と存じます。

さて、ながらくお待たせ致しましたが、会員の方々、待望のオリジナル盤が、出来映えも上々のうちに完成致しました。去る4月16日、会員の方々をお招きして、東芝EMIの第一スタジオで、オーディオ業界初めてのスタジオ生録会を行い、大変御好評のうちに、雰囲気も上々のマスターテープを完成致しました。今回は、特に、運びぬかれたVIP会員の皆様……と、言う事で、東芝EMIのチーフプロデューサーである行方洋一氏に、お願して、演奏者、当日スタジオのディレクター、ミキシング、トラックダウンなど、ほとんど全ての部分を、ワンマンプロデュースして頂きました。完全なオリジナル録音であると同時に、ライブ録音の雰囲気も良く出ており、そのライブに有り勝ちなSNの悪さ等は、少しも感じられぬ程の出来映えで、耳のこえたVIP会員の方が十分に御満足頂ける事と自負致しております。当社と致しましても、末永く御愛蔵していただく為、愛蔵家ナンバーをつけております。VIP会員制も、誕生満一年程で、まだまだ至らない点が多々有ると存じますが、会員の方々の御意見をおききして、充実した会運営を続けて行きたいと存じますので、今後とも、御指導、御鞭撻の程、よろしくお願致します。

DAM推進委員会

■制作にあたって

スタジオ・ライブ・レコード、この手のレコードは良く見かけるし聴けるものである。しかし今回のこのレコード用録音は又々別なものであった。つまりスタジオ・ライブでありながらそのお客様が録音ミキサーと言う具合だからである。プロが使うスタジオの中での録音会、それも山水のAX-7と言うミキシングマシンを使いお客様自身がミキシングをする。いつもの送り出しミキサーとして又いつものレコーディング・エンジニアとして考えと何んとかく気を使う仕事になってしまった。横内章次トリオとは気が合ったムードでいつもの様にハッピーに仕事出来るしボーカルの木津ジョージも気心が知れているしバックのボーカリストなので心配はない。ただ1つ心配であり一番気を使う事は来ていただいたお客様が本当に上手く音楽を録音していただけるのだろうか？と言うことだった。

このレコードはその時に演奏した10数曲の中からオーディオ的にも音楽的にも楽しめるものをセレクトして見た。ジョージのハッピーなボーカル、横章次トリオの乗りの良い演奏、当日会場録音していただいた方には自分のミキシングサウンドとの聴き比べにもなるサウンドであろう。マルチTRのテレコをリ・ミックスすることによりこのレコードの様な音作りも可能なのである。

制作者としての立場からこのレコードのポリシーを言うのとすれば次の様な表現になるかも知れない。このレコードはプロが録音しプロがレコード化するのだからやはりプロ的なものを前面に出そう。そしてやはり録音会での実況録音なのだから来ていただいたお客様の声や手拍子もその現物のムードを伝える1つのSE音としてあつかおう。ジャズのハッピーな面を前面に出しながらさすがプロ!!こんなレコード作りを考えただけである。ステージと言ってもスタジオの片隅、場所がもの

すごく狭い所をもって来て横内章次のエレキ・ギターはピークがものすごく高い。音のまわり込みをふせぐ為にも各使用マイクは指向特性の良いものを利用しよう、こんな考えで作り上げたのがこのレコードである。リ・ミックスでイコライジングを行ない音楽を作り上げたわけだがこのリ・ミキシング時にもこのレコードの制作ポリシーは残っている。オーディオ的に分離の良い音、これはもちろんだがスタジオ・ライブと云う点も目玉にしよう。サウンドを聴いていただければその辺のポリシーはお解りいただけるであろう。今思うにこれだけの分離で録音出来たのはやはり東芝スタジオだからだと思ふ。デッドな残響の少ないスタジオならではのサウンドがこの様なサウンド作りには大変メリットとして残って来るのである。これの演奏場所がライブの所だったらどうだろう。ドラムスの音がガンガン響きまくりこんな分離は出来なかったろう。このあたりの話をなぜここに書いたか、これは我々制作者がいつも心に想っていることなのであえて書いたわけだが我々制作スタッフはその現物(録音)によっての色々なマイクテクニックを含むものでカバーしているのである。このレコードはものすごく分離が良い音だ!!”こんな一口で1枚のレコードを評価されてしまうのは非常に制作スタッフとして残念でならないからである。なぜなら条件の非常にきつい場所でも我々スタッフは出来る限りのことをして出来る限りのノウハウを使いレコードを作っているからなのである。このスタジオでこれだけ素晴らしい音が出て来るレコードはなんと素晴らしい録音テクニックなのだろう。こんな風に聴いてほしいのである。演奏場所の良し悪しをまったく気にせず“このレコードは……。”とかたづけられてしまうのは何んとも淋しいのである。

今お聴きいただくレコードはこの演奏会場でのベスト・サウンドである。プロデューサーでありミキサーである私が今までの体験をもとに色々なテクニックを使い作り上げたものである。それも10数本のマイクアウトを当日参加されたお客様に送り返ししながら……プロのミキシング・サウンド、プロのレコーディングサウンドを皆様の素晴らしい再生システムでお楽しみ下さい。あとは周波数を聴くのではなく音楽をハッピーに楽しんで下さい。

チーフ・プロデューサー
チーフ・レコーディング・エンジニア



行方洋一

■ナマ録音に立ち合っ

このレコードは1976年4月16日に東芝イー・エム・アイの第1スタジオで録音されたものであるが、ただのスタジオ録音とはちょっと違う。

というのは、まずこれは、第一家庭電器が主催する生ロック会と同時にこなされたものだからである。

生ロック会を一般の人々はめったに入ることのできないレコード会社のスタジオで行なったのは今回が初めてであろうし、それをレコード化するのもまた珍らしいことである。

私は演奏開始の直前にスタジオに入ったのだが、既に1スタの中には4人のアーティスト達の他に、オープン・カセットなどのデッキがずらりと並び、生ロックに参加する40人の人達がその前に座っていた。普段スモール・コンボなどのレコーディング時には広々と感じる1スタも、こうなるともうびっしりと埋めつくされたといった感じである。

本番は参加者を40名づつ分けて、1～2時、3～4時の2回行なわれたのであるが、生ロック参加

の人達の前には見えない黒い機械が置かれている。最初はグラフィック・イコライザーかノイズ・リダクション・システムかとも思ったが、全部が同じ形をしているので、よく見るとサンズイから発売されているAX-7というサウンド・コンソレットと呼ばれるものであった。これが今回の生録音会におけるもう一つの重要なポイントになっているのであるが、普通、生ロック会という送り出し側でミックス・ダウンした2chのラインだけであり、参加する人達の作業は、デッキを運び込むのと、ただレベルを設定するだけ、といういささか味気ないものが多いのである。私は録音に参加しなかったのだが、こういった趣向を凝らしてあるのだったらデッキを持参すればよかったと後悔した。

最近、各社からただ聴くだけのオーディオ・ライブから、よりアクティブでクリエイティブな方向へと楽しみ方を広げることのできる種々のオーディオ・ミキサーが発売されているが、今回使用したAX-7はその先駆的存在のものであり、さらにこのシリーズの第二弾としてメーター・ユニット、発振器、キュー・モニター・スピーカーの3部で構成されるMA-7という、モニター・コンソレットも発表している。

このAX-7はマイク・ライン切換の4つの入力端子を持つものであり、全chにパンポットも設けられている。参加者の所へはボーカル、ギター、W.ベースを各1chづつドラムスは2chと計5chで送られていて、そこでこのAX-7をミキシング・コンソールのグループ・マスター的に使うわけである。従って各自の好みによって、各楽器のバランス、定位などを決め、自分自身の考え通りにサウンドを造り上げられるのである。

これはほんの少しの不安を伴うだろうが、普通の録音会にあきた人にとっては大きな喜びであろう。

このレコーディングのミキシングを担当したのはプロ・ユース・シリーズでオーディオ・ファンにおなじみの行方氏であるから、その音造りには文句のつけようがない。そして出来上がったこのレコードは、左にギター、中央にベースとヴォーカル、そして右にドラムスとごく一般的な定位であるが、参加したアマチュアの人達の録ったテープがどういった音創りがなされているか、是非聴いてみたいと思う。

ちょっと紹介が遅れたが、音源となったアーティストは横内章次トリオに木津ジョージといったベテランぞろいであるから演奏は全く申し分のない出来で、予定通りに進行していった。

2ステージにわたって演奏されたのは、サイド・バイ・サイド、枯葉などを含む10曲程であったが、ここには3曲のスタンダード・ナンバーと1曲のオリジナルが収録されている。

ここで簡単に曲について触れておく。

1. Sometimes I'm Happy

V. Uman が1927年のミュージカル “Hit The Deck” の為書いた作品であり、ナット・キング・コールなどの他多くのアーティストが取り上げているスタンダード曲である。2コーラスめに入ってから木津ジョージのメロディ・フェイクが聴きものである。

2. For Once In My Life

O.マーテン、R.ミラーの作品で67年にはトニー・ベネットがヒットさせ、翌68年にはスティーヴン・ワンダーが歌い大ヒットとなったおなじみの曲。このレコードでは、スローテンポで1コーラス歌った後にゆったりとした4ビートで仕上げられている。

3. Drink Up Vodka Martini

ちょっとユーモラスな雰囲気を持った横内章次のオリジナル・ナンバーでヴォーカルが抜けてトリオの演奏である。

この曲は同一メンバーによる演奏がPCM録音の“グリーンシリーズ”(TBM-5011)でも聴けるので聴き比べるのも面白いだろう。

4. I Can't Give You Anything But Love.

昨年あたりスタイリスティックスの歌でCan't Give You Anyting (But My Love) という似かよったタイトルの曲が大ヒットしたが、これは全く別の曲である。J. McHugh, D. Fields の作品であり、“捧ぐるは愛のみ”といった邦題がつけられていて、多くのプレーヤーが取り上げているが、ちょっと面白いところではサド・ジョーンズが歌っているものもある。

終止安定した横内章次トリオの演奏に洗ひ魅力の木津ジョージのヴォーカルなんて……秋の夜長、グラス片手に聴くにはもってこいのアルバムだろう。

小林 貢

■メンバーのプロフィール

横内章次

1933年11月9日に満州の大連で生まれる。'52年に小倉の米軍キャンプで演奏を開始して以来、渡辺弘とスター・ダスターズ、大沢保郎トリオほか数々のバンドで活躍している大ベテランで新人の育生にも力を入れている。また、作、編曲家としても卓越した才能を示し、ジャズ以外のジャンルでの活躍もめざましい。

ピッキングが力強く、鋭い立ち上りを持つ彼のギター・スタイルはジャズ・ファンはもとよりオーディオ・マニアにとってもたまらない魅力と云えよう。

参加したアルバムは数え上げたらきりがなが、ジャズとしての代表作は前述の“グリーンシリーズ”と小西徹との2リード・ギターによる“ブロード・オン・ザ・ロックス”(TBM-65)がある。

稲葉国光

1934年4月29日、静岡県下田市の生れ。寺田日暎三に師事し、八木正生トリオ、白木秀雄クインテット他に参加した後、日野皓正クインテットに参加し人気を決定的なものとしている。どんなセッションにおいても好サポートを示し、常に安定した実力を持つベテラン・ベーシストである。彼の参加したアルバムも数々あるが、少々地味ながら、煙草のような内容で高い評価を得ている中牟礼貞則(g)とのデュオ・アルバム“カンパセーション”(TBM-43)が彼自身の代表作と云えよう。

石松元

1940年9月7日広島生まれで、63年からプロとして演奏を開始している。松岡直也、小野満、東京ユニオン、ジェイク・コンセプト等を経て73年から横内章次グループで活躍している。

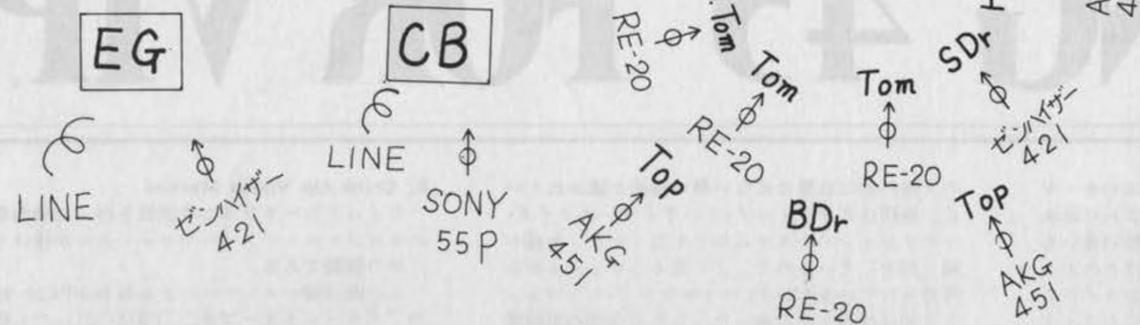
バックのサポートには定評があり、決して出過ぎるようなことなくしかもメリハリの利いたドラミングを聴かせてくれる。この点は彼の尊敬するドラマーがグラディ・テイトであるというのを聞くに充分うなずける。

木津ジョージ

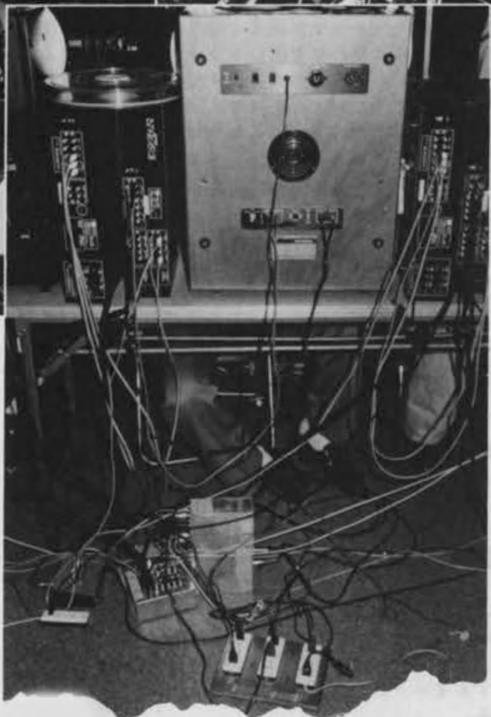
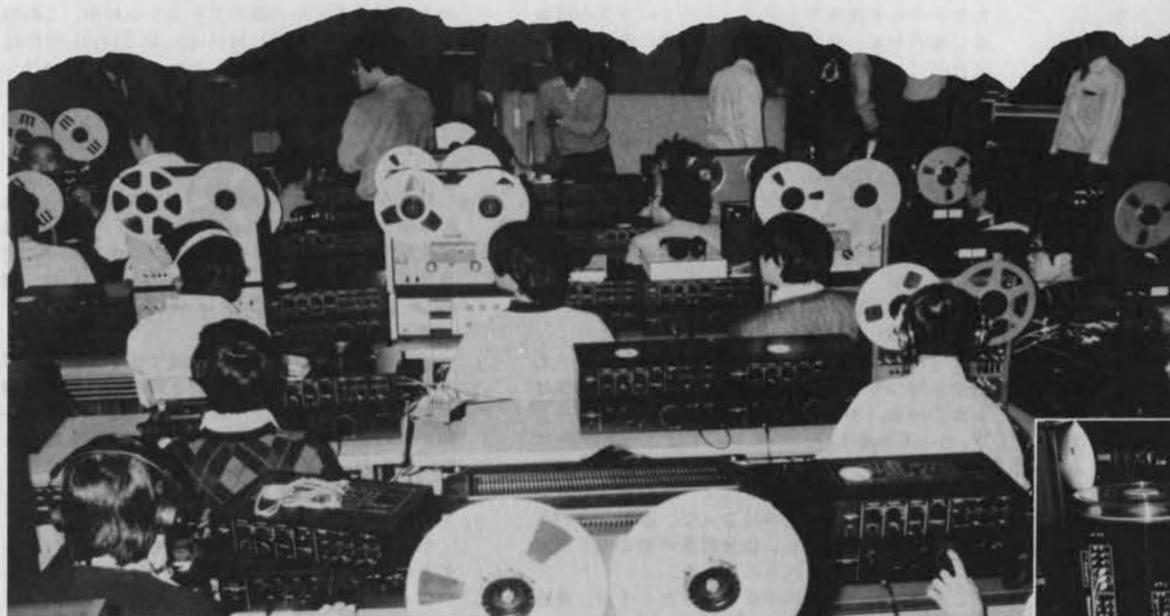
彼の経歴は東京出身という他詳細は不明でまさに幻のヴォーカリストである。音楽歴は古くスタンダード曲はほとんどこなす実力を持っている。現在は日本橋のPeacockと六本木のScotch 25でライブ中心に歌っている。

小林 貢

ナマ録データー



ナマ録出席者



●30センチ45回転レコードの取扱いについて

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- (2)33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードより線速度が早いので、針先のトレース性は良くなりますが、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪みなどの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。
- (3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。

- このレコードはカッティングレベルが一般のレコードに比べて大幅に高くなっており、カートリッジアームの調整が悪いと歪や針飛びを起こすことがありますので御注意下さい。
- 再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15℃～20℃位に保って下さい。

レコード材質—プロユース材料使用

レコード・カッティング	S.53.9.22
	東芝EMI(株)川口工場
カッティング・エンジニア	竹内省五
ドライヴ・アンプリファイアー	Neumann SAL-74
カッティング・レイズ	Neumann VMS-70
カッター・ヘッド	Neumann SX-74
録音	S.53.4.16
	東芝EMI第一スタジオ
企画	第一家庭電器株式会社DAM
製造	東芝EMI株式会社
協力	山水電気株式会社